

氏名	杉山 怜
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第12号
学位授与年月日	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	イヴァン・ヴィシュネグラツキーの弦楽四重奏曲に用いられた四分音技法 — 四分音による旋法性の形成 —
学位論文等 審査委員	(演奏審査) 主査教授 福本泰之 副査教授 百武由紀 副査教授 花崎 薫 副査教授 久留智之 (論文審査 及び最終 試験) 主査教授 福本泰之 副査教授 井上さつき 副査教授 久留智之 外部 審査員 教授 沼野雄司 (桐朋学園大学教授)
学位論文の要旨	
<p>サンクトペテルブルクに生まれ、フランスで活動した作曲家イヴァン・ヴィシュネグラツキー Ivan Wyschnegradsky (1893-1979) は、生涯にわたって微分音をめぐる探求を続け、複数のピアノによる作品や四分音による弦楽四重奏曲など多くの微分音作品を生み出した。これらの創作活動とともに、ヴィシュネグラツキーは微分音をめぐる理論的な探求を行って、自身の創作の基礎を築いた。ヴィシュネグラツキーの作品が様々な場所で演奏され、紹介されていくにつれて、次第にヴィシュネグラツキーの微分音をめぐる理論や概念に関心が寄せられていった。ヴィシュネグラツキーが執筆した理論的な著作『四分音による和声の手引き <i>Manuel d'harmonie à quarts de ton</i>』(1932) の再版や、音階を細かく分割して理想的な連続に至る「総音響 <i>pansonorité</i>」の概念に基づいたヴィシュネグラツキーの著作『総音響の法則 <i>La loi de la pansonorité</i>』(1953) の出版が行われ、ヴィシュネグラツキーの音楽観や音楽理論を明らかにする研究が進められた。一方、ヴィシュネグラツキーの作品に焦点をあてた研究は少なく、弦楽四重奏のための作品に関するものは、バルバラ・バルテルムス Barbara Barthelmes による弦楽四重奏曲第1番 <i>Premier quatuor à cordes</i> 作品 13 (1923-1924、改訂 1953) についての分析的な研究が唯一存在している。本論では、弦楽四重奏曲第1番の四分音技法のさらなる検討とともに、弦楽四重奏曲第2番 <i>Deuxième quatuor à cordes</i> 作品 18 (1930-1931) や、四分音音階による弦楽四重奏のための《コンポジション <i>Composition</i>》作品 43 (1960、改訂 1966-1970) といったヴィシュネグラツキーの四分音を用いた弦楽四重奏のための作品に焦点をあて、さらに四分音ピアノのために構想され、弦楽四重奏の編成で初演された《前奏曲とフーガ <i>Prélude et Fugue</i>》作品 15 (1927) についても対象としながら、作品の構成に共通する特徴について検討を行った。</p> <p>本論は、全3章で構成される。第1章では、ヴィシュネグラツキーの生涯と作曲活動について、</p>	

その変遷を概観した。1920年にフランスに渡るまでのロシア時代にヴィシュネグラツキーの微分音についての探求の萌芽が見出され、その後フランスでは、はじめに四分音に焦点をあてて楽器の製作や作曲活動を展開し、次いでさまざまな微分音を用いた探求や作曲活動へと発展したことが確認された。

第2章では、ヴィシュネグラツキーの四分音に関する理論的な探求について、その変遷をたどった。ヴィシュネグラツキーの探求は、倍音列にみられる微分音の考察から四分音の和声的な使用の試みへと移行し、また四分音の音程サイクルによる「非オクターヴ空間」の概念を生み出すとともに、さらに三和音を基本とした従来の和声理論を逆転させて四度和声による理論の構築へと向かった。この四度和声に至る理論的な探求の背景には、中世の音楽への関心が存在し、中世の旋法的な作品構成を発展させることで新たな音楽語法を生み出そうとしたヴィシュネグラツキーの構想が確認された。

第3章では、四分音を用いた弦楽四重奏のための作品の作品構想や作品構造の特徴について検討した。

弦楽四重奏曲第1番についてヴィシュネグラツキーは、自ら「連続体 continuum」と呼んだ、四分音の密集した和音に基づく作品構成を説明している。またバルテルムスは、本作品が各声部の収縮と拡大によって構成されていることを譜例とともに示し、その楽節構造を指摘した。本論では、この収縮と拡大のなかで形成されていく連続体のそれぞれの間にどのような関係があるかについて着目し、それぞれの連続体の関係性を検討することで、本作品が連続体を核とした、四分音によって拡張された旋法性を大きな構造として持つことを明らかにした。

《前奏曲とフーガ》作品 15 では、ヴィシュネグラツキーのロシア時代の歌曲《赤い福音書 *L'évangile rouge*》(1918-1920、改訂 1937)の第6曲の旋律に主題の音程構造が類似していることを指摘し、またフーガでは楽節構造が変化する箇所連続体が形成されていることを指摘した。各声部が連続体へ収束していく構造から、本作品の大きな構造として四分音による旋法性が見出された。

弦楽四重奏曲第2番では、各楽章にみられる楽節の要素を分類するとともに、各楽章の構成について検討した。本作品では、各楽章の要素が密接に関連し合って構成されていることが確認され、作品の構成のなかに旋法性の要素が見出された。

四分音階による弦楽四重奏のための《コンポジション》では、作品構成の様相や楽節の要素を分類し、作品の大きな構造を検討した。各声部の四分音による音階的な進行の様相に着目して、それらの進行が収束していく地点を確認することによって作品全体の構造を明らかにし、作品の大きな構造として四分音による旋法性の要素を見出した。

これらの検討から、ヴィシュネグラツキーの四分音を用いた弦楽四重奏のための作品において、四分音による旋法性の形成が大きな構造として見出された。

演奏審査結果の要旨

7曲全てを微分音作品で構成し、自作の曲も取り入れるなど博士後期課程にふさわしい意欲的なプログラムであった。ただ前半のプログラムでは、雰囲気異なる独奏曲などを取り上げるなど、より変化をつける選曲もあつたのではなかろうか。

全体的に作品に対する理解度が非常に高い演奏であった。端正な音色、余分な表現が一切無くストレートに作品に迫ろうとする姿勢に彼の人の人柄、音楽性を伺うことができ好感が

持てた。共演者からも一緒に作品を表現しようとする信頼関係が見て取れた。欲を言えば、微分音から表現される緊張感、感情的な高揚感などをヴァイオリンの表現技術、特に右手のボウイング、緊張感の途切れない音の繋がりなどもっと高い次元で表現できると、微分音の持つゆがんだ内面の表情、協和音に移行したときに聴き手に与える印象がより強力になったと思われる。また微分音の現代作品であれ、より楽譜から解き放たれた演奏を期待したい。音楽が内面の表現に向かう時とその反対に外側に向かう時との表現にもっと大胆さがあってもよかったのではないだろうか。そうすれば、彼が持っている端正な音楽づくりにさらなる幅の広さが加わるであろう。

ヴィシュネグラツキー：悲痛な調べとエチュードでは、微分音の魅力を明快に表現し、曲の性格付けにも成功していた。橋本：習作では、チェロのピッツィカートとヴァイオリンの旋律との対比を楽しめた。杉山：水縹の時を越えてでは、ピアノと弦楽器群にチェリストを加えた編成で変化を聴かせた。ギンホアン：テンスィオは、各パッセージの明確な性格付けとメリハリのある好演であった。クーパー：哀悼歌では、微分音を用いた旋律を表情豊かに歌い上げた。後半のカーリジョ：弦楽四重奏曲第3番「2つの草稿」では、2曲の性格を的確に表現できていた。ヴィシュネグラツキー：弦楽四重奏曲第2番は、微分音とヴィシュネグラツキーの魅力を存分に聴かせた快演であった。

総じて、現代音楽の演奏家としてのポテンシャルを十分に感じさせる演奏であった。彼の研究するヴィシュネグラツキーや微分音に関するコンサートを後期課程の間に（ドクトラルコンサート以外に）3回開催するなど積み重ねた成果が表れたコンサートとなった。今回、物理的な理由で調律をずらした2台ピアノを含む作品が取り上げられなかったのは、残念であったが、それも昨年実現させており、それも今回に行かされた形となった。また、ヴィシュネグラツキーの弦楽四重奏曲を中心にとともに演奏してきた共演者たちと、微分音と複雑なリズムで難解な作品を、単に微分音の作品というだけでなく魅力ある弦楽四重奏曲にまで育て上げたことは特筆に値する。

論文審査結果の要旨

杉山怜氏の学位論文は、ロシアに生まれ、フランスで活躍した作曲家イヴァン・ヴィシュネグラツキーの弦楽四重奏曲の四分音技法に着目したものである。全体は3章からなり、第1章でヴィシュネグラツキーの生涯と作曲活動について概観した後、第2章でヴィシュネグラツキーの音楽理論の変遷を年代順に辿り、第3章で四分音を使った弦楽四重奏のための作品を取り上げ、その特徴を明らかにしている。大変充実した研究で、実技系の論文としては稀に見る精度と内容をもっている。本論文は以下の三点において、すぐれた成果をあげた。

まず第一に、日本語の文献がほとんどない中で、フランス語やロシア語の原典を駆使して、ヴィシュネグラツキーの独特の音楽理論を読み解いたこと。しかも、単に外国語を訳すだけでなく、その独特の理論について誠実に考察を加え、既存の音楽理論とヴィシュネグラツキーの理論との橋渡しを見事に行っている。これは専門の音楽学者であっても容易ではなく学会に大きな寄与が期待されるものである。第二に、ヴィシュネグラツキーの弦楽四重奏曲の楽譜を丹念に読み込み、そこで扱われている微分音の様態、そしてとりわけ「連続体」の在り方ある程度明らかにした点。これも膨大な時間をかけなければ成し得

ないことでありその精密な楽譜の読解には舌を巻いた。「連続体」という概念は、ヴィシュネグラツキー独自のもので、この論点から今回取り上げていない作品にも解析を行うことでより大きな成果が得られる可能性は大きいと思われる。そして第三に、ヴィシュネグラツキーの四分音用法を「旋法」という観点で自ら整理したこと。単に作曲者の理論体系を参照するだけではなく、論文執筆者が新しい枠組みを設定する意欲は研究者としての確かな資質を示している。

一方で、若干の問題がないわけではない。審査会の席上でも複数の委員から指摘されたことであるが、3つの章がやや分離独立しており、論文としての弁証法的あるいは立体的な構成が実現できていない点、理論の紹介である第2章の充実ぶりに比して最終章での分析が分量としても内容としてもやや物足りない点、そして「旋法」という概念が十分な説得力をもって展開されていない点、すべてを「連続体」の概念による旋法性で説明することはやや無理が生じている点などは、今後改善すべき課題として残されている。

しかし、論文全体に通底する論理的で精密な記述、そして何よりも細部をおろそかにせず、きちんと自らの頭で考えながらこつこつと研究を続けてきた真摯な姿勢は特筆に値するものであり、きわめて優秀な博士論文であり、博士の学位に値すると判断する。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

演奏審査では、全て微分音を含んだ作品を並べた意欲的なプログラムで、論文の研究対象でもあったヴィシュネグラツキーの弦楽四重奏曲の演奏も聴き応えのあるものであり、表現者としての資質を有していると認められた。

論文は、実技系の論文としては稀に見る精度と内容であり、新しい枠組みを設定する意欲を感じられるものでもあった。特に第2章は秀逸で、学会に大きな寄与が期待されるものである。

今後さらに研究を深め、演奏家、研究者として社会に大きく貢献できる人材であることを確認し、審査委員全員一致で「秀」の成績を認め、合格と判定した。